

聖書：ピリピ 2：6～8

説教題：神の御姿である方なのに

日時：2016年12月25日（クリスマス記念朝拝）

ピリピ人への手紙を学んで来て、今日はちょうどこの箇所となりました。今日はこの後、洗礼式、転入会式、聖餐式、写真撮影、そして午後のクリスマスコンサートとたくさんプログラムが控えていますので、説教はなるべく短めにとの注文をいただいています。そこで今日はこの箇所の特に前半部分に焦点を当てて、残りは次回9～11節と合わせて見たいと思います。さてこの箇所にはキリストのこの世への誕生のことが語られています。まさにクリスマスの出来事についてです。これを私たちはどう見るべきなのか、三つのポイントでこの箇所から学びたいと思います。まず注目したいのは6節最初の「キリストは神の御姿である方なのに」という部分です。しばしば学び会などではそう話していますが、氷山の一角という言葉があります。海に浮かんでいる氷山の見える部分は全体のほんの一部分にしか過ぎません。水面下には水の上に出ている体積の実に10倍もの氷が隠れています。ですから目に見えている部分だけを見て、全体が分かっているようなつもりになってはならない。イエス様に関することも同じです。地上の歴史に現れた、私たち人間に見える部分だけを見ていたら、この方を正しく理解することはできません。この方を知ろうとするなら、人間の歴史には現れていない部分まで考えなければなりません。そのキリストに関する真理として、ここにキリストは「神の御姿である方」だと言われています。「御姿」という言葉の細かなニュアンスについては学者たちが色々議論していますが、そのエッセンスは「その本質を持っている」ということのようなのです。すなわちキリストは神の本質を持つ方である。そしてここに御姿「である」と言われています。途中からそうなったものではありません。あるいは過去にそうだったというのでもありません。「である」という方。つまりキリストは永遠の初めから存在し、いつまでもそうあり続ける神であるということです。ですから私たちはイエス・キリストをベツレヘムの飼い葉桶から始まった人として見てはならないのです。キリストは歴史に人として現れる以前から神なるお方。歴史以前の初めから存在しておられる神なのです。

今日は三位一体について述べる時間がありませんが、ここでキリストが神の御姿であると言われている時、それは父なる神とは区別された人格として語られています。聖書は父なる神が神であると語ると同時に、キリストも神の御姿である方、すなわち父なる

神と同等同質の神であると言います。これは聖書の他の箇所も語っていることです。ヨハネの福音書 1 章 1 節：「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」 ヘブル書 1 章 3 節：「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり」。ヨハネの福音書 17 章 5 節：「今は、父よ。みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」 私たちはキリストについてのこの真理をまず良く思い巡らす必要があるのではないのでしょうか。この後見ますように、キリストは人となって私たちのところに来てくださいました。この世界に住み、私たちがじっと見つめ、触れることのできる存在となられました。しかしそのあまりキリストを父なる神より一段劣った方として考えてしまってはならないのです。この方は、その本質において父なる神と全く同等のお方です。ただ栄光と賛美のみがふさわしい神ご自身です。全てにおいて富んでおられ、唯一の神にふさわしい尊厳に満ちた方なのです。

その神の御姿である方がどういう状態へ入られたのでしょうか。2 番目に注目したいのは 7 節前半の「ご自分を無にして、仕える者の姿を取り、人間と同じようになられました。」という部分です。ここにキリストが「ご自分を無にした」と言われています。神が人間になることは私たちがどんな存在になることにたとえられるのでしょうか。それはたとえば一匹のアリになること、ミミズになること、あるいはミジンコになることにたとえられるのではないのでしょうか。もしミジンコになったら、今できる多くのことができなくなってしまいます。今食べている美味しい食べ物も食べられなくなりますし、面白いテレビも見られなくなりますし、楽しい趣味もできません。そうなってもいいと思う人は人はまずいないと思います。もちろんこのようなたとえには限界がありますが、神が人となるということはそれ以上のことと言われなければなりません。

ちなみにここでキリストが「ご自分を無にした」という際、この意味を誤って理解しないように注意しなくてはなりません。この「無にする」という言葉は「むなしくする」という意味ですが、ここのギリシャ語の「ケノーシス」という言葉に基づくケノーシス説と呼ばれる立場があります。それはキリストが人となった時、神であることをやめられた、あるいは幾分かでも神の性質を失ったとする理解です。しかしそれは聖書の主張とは合わないものです。神は神であることをやめることはできません。神はいつまでたっても神です。ただキリストはこのクリスマスの時に、神というご自身の性質の上に、人という性質を加えてお取りになったのです。ですからここでご自分をむなしくしたと

言われている時、それは神の性質をいくらかでも脱ぎ捨てたということではなく、神でありつつも、ご自身にふさわしい栄光、賛美、尊厳を捨てられたということを言っているのです。そして「仕える者の姿を取った」。これは「奴隷」という言葉です。奴隷とは自分の権利を持たない者です。世界の創造者なる神が何と、そのように屈んで奉仕する奴隷の立場へと入られた。そして「人間と同じようになられ」ました。ここで「人間と同じように」と言われているのは、ただ「人間になった」というだけでは表現が十分でないからだと考えられます。すなわちこの方はまことの人間となったけれども、ただそれだけの存在ではない。先に見たようにキリストは神であることをやめてはおられません。その本質は神です。そこに100%の人間性を加えられました。そのニュアンスが「人間と同じように」という表現に現れているのでしょうか。そういう意味で地上にいられたキリストはなお神である方としていつでも元の栄光に戻ることができました。人間になった後、もうこんな生活はやっていられないと言って、ご自身にふさわしい栄光と力の状態に戻ることができました。しかしキリストはご自分をむなしくし、しもべとなって、人間として歩まれたのです。

このキリストのこの世への誕生はさらなる目的とつながっていたことが7節後半から8節に語られています。それは十字架の死ということです。来週この部分からもう一度見たいと思いますが、旧約聖書に「木につるされた者は、神に呪われた者である」とあります。つまりキリストが十字架へと進まれたのは、私たちに代わって呪われた者となってくださるためでした。そのことによって罪の代償を払ってくださり、私たちに罪のさばきとその力から贖い出してくさるためでした。ここからもクリスマスは単にそれだけで考えられるべきものではないことが分かります。クリスマスの出来事は十字架の死とセットのことなのです。実に神ご自身である方は、ご自分をむなしくして私たちと同じ人間になられたばかりか、最後に十字架について、私たちの上に降りかからなければならない呪いを代わりにその身に引き受けてくださるのです。そして多くの人を救い出すために、無限の価値を持ついのちを注ぎ出してくさるのです。そこに至るしもべの生活をささげるために、一個の赤ん坊となって入っていられたのがこのクリスマスなのです。

最後三つ目に見たいのは、このように行動されたキリストの思いについてです。神である方が無となり、人となって、贖いの死を遂げるために人間の歴史に入っていられた。果たしてキリストはこのことをどう考えていられたのでしょうか。これはキリストが

嫌々なされたことだったのでしょうか。強いられて渋々行なったことだったのでしょうか。そうではないことがここに語られています。キリストはこのことを自発的にしてくださいました。6 節後半に「神のあり方を捨てられないとは考えず」とあります。ここは直訳すれば「神と等しくあることを固守すべきこととされないう」となります。キリストは神の御姿であられる方ですから、その方にふさわしい尊敬、賛美、栄誉を受けるべきお方です。しかしキリストはそういう神としてのあり方をわたしは捨てられないとは仰らなかつた。それにしがみつき、わたしはこの栄光ある立場から降りることはできない、これは譲れないとはお考えにならなかつた。むしろそのご自身にふさわしい権利、特権、立場を捨てられたのです。なぜでしょう。それは私たちの救いのためです。キリストは私たちへの愛によってご自身をへりくだらせられた。私たちのことを思って、当然主張して良い権利を手放し、それを後に捨て置いて、十字架の死へ向かってご自身をむなしくされたのです。

クリスマスの出来事は、聖書の目立つ箇所では父なる神の私たちへの愛の現れとして語られています。ヨハネ 3 章 16 節：「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」 I ヨハネ 4 章 9～10 節：「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」 これらの御言葉によれば、クリスマスの出来事には神の愛があかしているのであり、私たちはその神の愛を深く感じてこの時、喜び祝うべきであるということになります。しかし私たちが愛してくださったのは父なる神だけではありません。御子キリストもそうです！キリストは決してこの時、無理矢理に地上に送られたではありません。あるいは父なる神が計画したからと言って、ただ任務を遂行する方として来たものではありません。確かに神とキリストの心は一つです。しかし今日のピリピ書 2 章 6～8 節で述べられているのはキリストのことです。ここにあるのはキリストの思いです。この主語はキリストです。キリストが私たちを顧みてくださり、神としてのあり方を進んで自発的に捨ててくださったのです。その姿を見て、このクリスマスの時、この方を礼拝するようにと私たちは招かれているのです。

そしてこのことによって私たちの生き方が導かれるようにとパウロは述べています。

このピリピ書2章最初の部分は、一致について語られているところです。私たちの問題は6節のキリストの生き方とは反対の生き方をしていることにあるのではないのでしょうか。すなわち自分のあり方を保ち、自分の権利を主張することにばかり関心が行っている。自分は当然これこれのことをして良いのだ、相手に譲る必要はない。私は頑張ってここまでの地位を築いて来たのだからここから降りることはできない。そうして自分の立場や自分のメンツ、自分の考えに固執し、それを誇っていることがお互いの間に一層の争いと対立を引き起こしているのではないのでしょうか。しかし見て来ましたように、神である方が、わたしはこの神のあり方を捨てることはできないと言って、その地位にしがみつくことをされなかった。当然それをして良いお方が自発的に、私たちへの愛によってそれを後に捨て、十字架の死にたどり着くために降りて来てくださった。すべての上にあります世界の主権者が、その特権に固執されなかったのに、一体私たちは何に固執しているのでしょうか！私たちは今朝、私たちへの愛によってご自分のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分をむなしくして、私たちのところに来てくださった方を仰ぎ見つめて心からひれ伏して感謝の礼拝をささげたいと思います。そしてその方の救いをいただくことを通して、私たちもこの方にならい、この方の愛をいくらかでも映し出して、神に栄光が帰される歩みへと導かれたいと思います。